キリストを信じるということ

2013 年 4 月 29 日
佐々木正明

救われるための唯一の条件は、主イエスを信じることです。それが聖書の教えです。信じるという言葉もまた、本来、信頼するという意味であって、ちょうど、幼子が両親に頼りきっている状態に近いものです。「ＵＦＯを信じる」とか、「地球以外にも高等生物が存在すると信じる」などというのとは、まったく意味が違います。

Ｉ．　物語

若草の萌える日向道を、白い靴の女の子が駆け抜けた。不意を突かれて足元から飛び立った、赤いタテハ蝶は、高く舞って欅の梢に消えた。ついこの前までは、背中をすべて占領していたランドセルが、すっかり小さくなって、右に左に軽やかに踊った。

「今日はお母さんと、イチゴジャムを作る約束なんだ。」

先週、お母さんが病気で寝込んでいたときに、喜んでもらいたくて作ったイチゴジャムは、無残にも失敗した。お母さんがいつも作るような、明るく新鮮で透明な赤じゃなくて、近くのスーパーでも売っているような、くすんで黒ずんだジャムになってしまった。

「今日は、お母さんの、きれいなジャムの秘密を教えてもらうんだ。」

★　　★　　★　　★　　★

女の子は、近ごろの自分に、得体の知れない変化が起こっていることに、うっすらと気づいていた。ずいぶん前から、ぼんやりとした不満が、腹の片隅にうすい皮膜のように付着していた。それが、日を追うごとに何層にも重なってこびりつき、しこりのように固まって疼きだしていた。

「お母さんはどうして・・・・・わたしのこと、あまりかまってくれないかしら・・・。」

　物心がついたころから、お母さんの体が弱いことには慣れていたつもりだった。ほかの子たちのお母さんのように、活発に動き回ることができないことは知っている。でも、運動会にも父母参観日にも、来てくれたことがない。学校行事に来てくれるのは、いつも、無理に都合をつけてくれたお父さんか、お父さんのお母さん、つまりおばあちゃんだ。

「いちどくらい、来てくれてもいいのに・・・・。」

　友達のように、お母さんと手をつないで散歩に行ったことも、記憶にない。遊園地で一緒に遊んだこともないように思う。

「でも今日は、お母さんが、きれいなイチゴジャムの作り方を、教えてくれる約束なんだ！」

★　　　★　　　★　　　★　　　★

「ただいま！」

　弾ませた息を整えもしないで、玄関のドアを開けた。

　返事はなかった。台所と居間と浴室にすばやく目をやってから、二階のお母さんの部屋を見つめた。また、一休みしいているのかもしれない。

「おかあさん。ただいま・・・」

　そっとドアを開けると、ベッドに横たわる色白の顔が目に入った。どうやら深く眠っているらしく表情はない。

「おかあさん。今日はイチゴジャムを一緒に作る約束よ。」

　そっと、でも、ちょっとだけ力をこめて語りかけてみたけれど、黒く長いまつげには、何の変化も現れなかった。

「今日は一緒にイチゴジャムを作るって・・・・約束だったのに・・・・。」

　長い間がまんをして、心の奥深くに溜めてきたものが、肺を締め付け、喉を絞り上げた反動で、涙腺を一挙に緩めてしまった。

「今日はイチゴの・・・・今日はイチゴで・・・・今日は一緒に・・・・。」

　言葉にならないまま、ぽたぽたと床にこぼれる水滴の痕を数えた。それがどんどん増え続けるのにびっくりしながら、気がついた。

「わたしは泣いてるんだ。」

　それなのに、床に落ちた涙の跡を数えている、おかしな自分にも驚いた。

誰かがそっと肩に触れた。

「驚いちゃったのね。お母さんが眠ったままだから・・・・。」

　おばあちゃんの声だった。

「さ、さあ。向こうに行きましょう。お母さんを起こしてはいけないから。お母さんは、急に具合が悪くなったから、お医者さんをお呼びして、注射を打っていただいたのよ。だから今はぐっすり眠っているの。それで、わたしも駆けつけたわけ。でも、大騒ぎするほどのこともないようだから、あなたには連絡しなかったのよ。」

　女の子は、おばあちゃんの優しい声を聞いたとたん、なぜか、もっともっと泣きたくなった。いや泣きたくなったから泣いたのではなく、泣きをコントロールしている虫が、無断で腹と胸と頭とほっぺたで騒ぎ出して、勝手に激しく泣くように根回しをしたようだった。

「今日は・・・一緒に・・・一緒に・・・・。」

　しゃくりあげが息を詰まらせて、上手く話せなかった。

「イチゴジャムを作ってくれるって、きれいなジャムの作り方を教えてくれるって、約束していたのに・・・・・お母さん。また、寝込んでしまうんだもン・・・・。」

　そういったとたん、理性がとどめるのも聞かずに、感情が「わたしの出番よ」とばかりに言葉をぶっつけ始めた。遊んでくれないお母さん。かまってくれないお母さん・・・・。一緒に買い物に行き、一緒に公園に行き、一緒にピクニックにも行ってくれるという、友達のお母さんのことまで、羨ましげに話して、腹の底で疼いていたものを吐き出した。吐き出しながら、おばあちゃんのエプロンの端で、濡れた顔をなんかいも拭った。

★　　　★　　　★　　　★　　　★

「お母さんが大好き！　いつまでも元気でいてほしいの・・・・。」

　エプロンのフリルって意外に固いんだと、冷静沈着に判断しながらも、ふと、そう思った。でもなんだか恥ずかしくて、言葉にしないまま、のどちんこの下に押し込めてしまった。すると、鼻水までも流れ出して、またエプロンのお世話になった。

　お母さんがいつも自分のことを心配してくれていること、どんなときでも、できるだけの事をしてくれていることは、よく分かっていた。お母さんのためなら、自分は何だってしてあげようと思っていた。でもそんな気持ちも、今だけは、飼い猫の食べ残しと一緒に、ゴミ袋に詰め込んでしまいたい。

「お母さんなんて、大嫌い！」

　思っても見なかったことが、口を突いて出た。

「約束を守ってくれないお母さんなんて、大嫌い・・・。」

　ちょっと補足説明が必要だと感じて、あわてて付け足した。

「そうだったの。あなたもさびしい思いをしていたのね・・・・。お母さんは体が弱いから・・・。ほかのお母さんたちのようにはできなかったものねぇ・・・。分かっているでしょう？　私もね。あなたのお父さんが、お母さんと結婚したいって言い出したとき、ほんとうは大反対だったのよ。体が弱いお嫁さんを持つと、苦労が大きいからね。でも、お父さんは・・・。あなたのお父さんのことよ。お母さんが大好きだったの。どこがって・・・？　やさしい、と・こ・ろ。　だから、どうしても結婚するって、私たちの反対を押し切って・・・・、結婚したのよ。」

　初めて聞く両親の結婚前の話に、女の子はしゃくりあげるのも忘れて、聞き入りそうだった。でも、どういうわけか横隔膜の下のほうが、まだ衝動運動を止めようとはしないので、上手い具合に、おばあちゃんの話には、あまり興味がなさそうに、よそおうことができた。

「体が弱いお嫁さんを持つと、苦労するというのは、おばあちゃんの苦労のことだろうか、お父さんの苦労のことだろうか・・・・・！？」

　この言葉に少し傷ついて、意地悪に聞き返したくなった自分に、また驚いた。ついでに、腹立たしくもなったとたんに、しゃくりあげがなくなった。

★　　　★　　　★　　　★　　　★

「それで、あなたがお腹に宿ったとき、お医者さんに言われたの。この子を産むと、お母さんの命が危ないって。お母さんを助けようとすると、赤ちゃんは助からないって。へたをすると、両方とも死ぬことになるって。」

「・・・・そんなことは全然知らなかった。お母さんはなんにも話してくれなかった・・・・。」

「それでね。お父さんはどうしようかと、とても迷ったの。私もそれを聞いたとき、本当に悩んだのよ。初孫は早く見たかったけれど、そう、今はこんなに可愛くなった初孫をね。」

　おばあちゃんは、改めて女の子をギュギュッと抱きしめて、続けた。

「早く見たかったの。でも、お母さんに死なれては、お父さんが可愛そうでしょう？」

　女の子の心臓が、ドックン、ゴットンと言い出した。校内マラソンで、1500 メートルを思いっきり走ったときだって、こんな音はたてなかった。

「おばあちゃんに気づかれたら、嫌！」

　手を突っ張ってそっと体を離すと、心臓がまるで嫌がらせのように、もっと高鳴った。

「でもね。お母さんはぜんぜん迷わなかったの。はっきりとこう言ったのよ。『私は二十五年間生きてこられて、本当に幸せでした。優しいお父さんとお母さんに支えられて、とっても幸せでした。そして、すばらしい結婚相手に恵まれて、たくさん愛されて、素敵なお母様とお父様にも、とても良くしていただいて、本当に、本当に幸せでした。』

「・・・・・・・・・・・。」

「優しいお母様とお父様というのは、もちろん、このおばあちゃんと、おばあちゃんのだんなさん、あなたの、おじいちゃんのことよ・・・。」

　ちょっと笑いを込めて、続けた。

「あなたのお母さんは言ったの。『もう充分幸せです。でも、お腹の子は、まだ、幸せをまったく知らないんです。だから、この子にも幸せを知って欲しいんです。私はどうなってもかまいません。この子を産ませてください』って。」

　また涙腺が勝手に開いて、涙をどっと押し出してきた。それをなんとかとどめようとしながら、さっきの涙とは違う涙だと、女の子は気づいていた。そして、

「でもおんなじ味だ」

　冷静に判断した。

★　　　★　　　★　　　★　　　★

「それで、本当に大変だったの。あなたがお腹にいる間。お母さんはとても苦しい思いをしたのよ。でも、泣きごとは一言も吐かなかったわ。自分が決心したことだからと、がんばったの。そしていよいよ出産とのときは・・・・。」

　女の子は心の中でつぶやいていた。

「私が生まれるときに、そんなことがあったなんて・・・。当たり前だけど、何にも覚えていない。お母さんは何も教えてくれなかった。お父さんも、何事もなかったように・・・・でも、一度だけ、わたしが『弟が欲しいな』って言ったとき、ちょっと困った顔をして、『うーん。それは難しいかも・・・ね』と言ったことがあったわ。」

　「それは、それは、おお騒動。お母さんの呼吸は止まってしまうし、心臓までも止まりそうになるし・・・・。お父さん・・・そう。あなたのお父さんよ。お父さんはただもう、分娩室の前の廊下をせわしなく、行ったりきたりするだけで、ほかには何にもできないし。私たちだって、お祈りする他はなぁ～んにもできなかったの。」

「お父さんはいつでも、何にもできないんだから・・・・。」

　女の子は、ただオロオロと廊下を歩き回るお父さんを想像して、思わず笑った。だけど、涙がたくさん流れていたので、おばあちゃんには、感づかれないで済んだはずだ。

「でも、はじめから都会の大きな病院に、お願いしていたから、やっと助かったのよ。そして、

あなたも無事に生まれたって言うわけなの。」

「・・・・・・・・・。」

★　　　★　　　★　　　★　　　★

「そのあとも大変だったのよ。お母さんは一生懸命になって、あなたを育てようとしたわ。普通のお母さんたちたちよりも、もっともっと、何倍も努力したのよ。でも、お母さんはあなたを生んだあと、それまでよりも、ずっとお体が弱くなったの。運動会にもなんども行こうとしたわ。途中までは出かけたこともあったのよ。あなたが、お母さんの弱さを受け継がないで、元気な女の子になって、活発に走り回るのを、お母さんはとても喜んで、どうしても見たいと言って･･･。でも、学校に着く直前に立ってられなくなって、あなたのお友達のお母さんたちに連れられて、戻ってきたのよ。

「そんなこともあったんだ！」

　運動会に来てくれないお母さんを、ちょっぴり恨んで、一等賞の賞品をあてつけがましく見せたとき、お母さんは、

「今日はごめんね。見に行けなくって・・・・。」

　と言っただけだった。

「遠足にも一緒に行きたいと、ずいぶんいろいろと、やってみたらしいのよ。お医者さんにお願いして、特別な薬もいただいたりして・・・。でも、やっぱりできなかったの。それで、こんどは、せめてお弁当だけでもって、美味しいお弁当作りをはじめたの。」

「わたしの弁当が、美味しいだけでなく、とってもきれいで、友達の間でも有名だったのには・・・・そんなわけあったんだ・・・。」

「あなたが言っていた、真っ赤なイチゴジャムも、あなたが喜ぶようにって、熱心に料理の本をさがして、やっと見つけ出したのよ。」

「わたし・・・何にも知らなかったわ。お母さんが、死ぬかもしれないって分かっていたのに、わたしを産もうとしてくれたことも。何回も、運動会に来ようとしてくれたことも、遠足のことも、イチゴジャムのことも」

「あなたは知らなくても良かったのよ。そんなことは・・・・。」

おばあちゃんは、女の子の心を見透かしたように続けた。

「あなたはお母さんが大好きで、お母さんもあなたが大好き。それだけでいいのよ。あなたはお母さんに甘えて、お母さんはあなたに大切にする。それが一番大事なことなの。でも今日は、お母さんのこと・・・、ほんのちょっとだけ嫌いになったのね。ううん。本当は嫌いになんてなっていない。ただ、すこしだけ不満が顔を出したのよね。お母さんが、元気に動くことができないから・・・・。だから、あなたのおかあさんが、あなたのためにどんなことをしてくれたか、ほんの少しだけ、お話してあげたの・・・・・。」

女の子は何にも言わずに聞いていた。でも心は大騒ぎだった。

「・・・・お母さん。ごめんなさい。」

お母さんのことがもっと好きになった。おばあちゃんの話を聞く前よりも、千倍も好きになった。

「おかあさん。ありがとう。」

心のなかでつぶやいたら、一万倍も好きになった。

Ⅱ.　神が求めておられること

救いの条件として、神が人間に求めておられるのは、唯一、信仰です。信仰とはすなわち信頼であり、心のつながりです。神が何をしてくださったかを理解することではありません。無限の神がなさったことを、人間がきちっと理解できるはずもないのです。また私たちの救いのために、神が何をしてくださったかという話を、事実だと信じることでもありません。私たちは事実を信じて救われるのではなく、事実を作ってくださったお方を信頼して救われるのです。

私たちが神を信頼し、キリストを信頼するならば、その信頼を神は喜んで、私たちを受け入れてくださるのです。神が、あるいはキリストが、私たちの救いのためにどんなことをしてくださったかを理解し、それを事実として信じるのはすばらしいことです。でもそれは、私たちが救われるための条件ではありません。私たちが救われるのは、神がキリストにあって何をしてくださったかを信じる信仰によってではなく、神を信頼し、キリスト

を信頼する、信頼によって救われるのです。

自分たちの救いのために、神はどれほど大きなことをしなければならなかったか、人間がまったく知らなくても、神を信頼して生きさえすれば、神はその信頼の生き方を喜んで受け入れ、救ってくださるのです。神が求めておられるのは、人間の冷たい理性による理解と判断ではなく、信頼という言葉に含まれる暖かい心の交わりです。

人間は、罪を処理してくださった神の贖いの働きのゆえに、救われることができます。キリストの業績があったからこそ、救われるのです。しかし、キリストの業績を理解してそれを信じるから救われるのでありません。私たちを救うのは、キリストの十字架の上での業績ではなく、キリストです。救いの道を完成してくださった救い主、キリストを信頼して救われるのです。まだキリストの贖いの働きが遂行されていなかった旧約時代の人々も、やがて贖いの働きを完成させることになっていたキリストによって、救われたのです。

旧約時代の人々は、キリストについては知りませんでした。その働きについてはまったく理解していませんでした。ところがその彼らも、神を信頼することによって、キリストの贖いの働きのゆえに救われたのです。私たちはキリストの働きを理解して救われるのではなく、贖いの働きを完成されたキリストを信頼して救われるのです。

それは信仰による救いの神学の基盤となった、アブラハムの例にも明らかです。アブラハムはキリストを知らず、十字架も知らず、贖いも、罪も、悔い改めも、赦しも知りませんでした。しかし彼は、神様を信頼するという生活態度のゆえに、義とされ救われたのです。アブラハムが神を信じたというのは、年老いてから自分の子が与えられると信じたことに凝縮されて現れてきた、日ごろの彼の信仰態度を言い表した言葉であって、その一瞬だけの心の動きではありません。

アブラハムは、知らなかったキリストを信じて救われたのではありません。神がキリストをご存知でありその、贖いのお働きをあらかじめご存知だったのです。ですから、神はキリストにあって、キリストを知らないアブラハムにキリストの義をまとわせ、救うことができたのです。重要なのは人間の知識でも理解でもなく、神のご理解であり、神の愛です。

Ⅲ.　パウロの伝えた普遍的福音

イスラエル人にとっての福音は、イスラエルの回復でした。キリストの弟子たちもそれ

を夢見て、キリストに従っていました。キリストが、回復したイスラエルの王となられるときには、自分たちもそば近く仕える高官になれると、野望を抱いていたのです。ところがそれは、神の国の福音の誤った理解によるものでした。キリストがもたらした救いは、現世的な民族国家の救いではなく、全人類の永遠の救いだったのです。

キリストの昇天後、弟子たちは、二重の意味で福音を理解し直さなければなりませんでした。第一は、福音の適用がイスラエルに限られず、全人類に及ぶということであり、第二は、現世的な国家の回復ではなく、永遠の神の国、永遠の命に関わることだということです。

このことを最初に理解し、それを理論化し、人々を説き伏せ、広めて行ったのが使徒パウロでした。とはいえ、いかに優れたパウロにしても、この新しい福音理解を、自分ひとりの思考によって得たのではありません。聖霊の啓示と導きがなければ不可能でした。ですから、これはパウロの神学というより、聖霊の啓示の神学なのです。

キリストが甦って、天に昇ろうとしておられたときでさえ、弟子たちの福音理解は「イスラエルの回復」でした。（使徒 1：6）　それを、全人類の永遠の命に関わる福音に変えたのは、聖霊のお働きです。聖霊はパウロに啓示を与えて理解を導いただけではなく、ペテロにも具体的な導きを与えて、異邦人の救いの可能性を理解させ、弟子たちの間に、パウロの教えを受け入れる素地をつくり上げてくださったから、可能だったのです。（使徒 10：1～11：18）

とはいえ、パウロの築いた異邦人の神学も、まだまだ不十分なものでした。土台は確かにしっかりと据えられ、揺るぎのないものです。ところが建物はまだ完成されていないのです。

パウロは救いを語るとき、いつも律法に帰り、律法から説明しています。その律法を、彼は「養育係」と呼んで、救いの福音に導く役割を持つと説明しています。しかし、彼が福音の普遍性を説き、信仰による救いを主張するときは、律法に留まることができませんでした。律法よりさらにさかのぼって、アブラハムの物語に行かなければならなかったのです。

ここで重要なのは、律法はユダヤ民族に与えられたものだという事実です。もちろん、全人類にも応用される内容を持っていますが、一義的には、ユダヤ民族が救い主を誕生させる民族としてふさわしいものとなるために、ユダヤ民族に与えられたのです。そしてその中で、救い主の誕生が予言されているのです。

ですから、その律法から説明するパウロの救済論は、どうしてもユダヤ民族的となりました。その上、彼の神学議論の大部分は、異邦人たちに福音を理解させるためではなく、ユダヤ人クリスチャンたちに、福音の普遍性を理解させる目的で書かれたのです。ユダヤ民族がまず先にあるのです。そこから次のステップとして、異邦人への適用としての、普遍的福音なのです。

それだけでなく、もともとパウロの視点はユダヤ人のものでした。ユダヤ教徒のパリサイ派の律法主義的な視点で、彼は福音を捉え説明しています。それを異邦人への福音という語りで、普遍化したのです。それはそれで良いのです。しかし神の目的は、はじめから全人類の救いであって、ユダヤ人に対する取り扱いは、全人類の救いのための手段に過ぎないのです。この点は、当然、パウロ自身も気づいてはいました。ところが、それ以上発展させてはいないのです。

Ⅳ.　文化の子だったパウロ

パウロの神学は聖霊の啓示によるものでしたが、一方では、彼の生まれ育った環境と、活動した状況に啓発されたものです。ユダヤ人、しかも律法に精通したパリサイ派学徒のパウロにとって、救い主は当然旧約聖書の律法から説明されるべきものでした。異邦人都市で生まれ育ったために、異邦人に対する蔑視をあまり持たずその文化にも親しんでいた彼はまた、異邦人に対する理解力をもって、ユダヤ人のためであると理解されていた福音を、普遍的な福音に変えていくにふさわしい人物でした。

ところがパウロにも、決定的と思われる、少なくても私たちのような、律法になじみがなく天地の創造者にも理解のない、まったくの異邦人である日本人の立場からすると、決定的と思われる弱点があったのです。それは、彼の異邦人の神学が基礎作り、土台固めだけで終わっていて、それ以上に及ぶことがなかったことです。

パウロは異邦人の使徒というタイトルを得ていながら、また、異邦人の神学の土台をすえる働きをしていながら、実際には「完全な異邦人に対する伝道」をしていません。それがこの弱点のもとです。使徒の働きを読み、彼の活動の足跡をたどると明白なように、彼は、当時の主要都市を回ってそこに教会を築くという方策を実行していました。そのために彼は成功したともいえますが、彼の伝道は、ほとんどの場合、ユダヤ教の会堂から始められたのです。

当時の多くの主要都市には、必ずと言ってよいほど、ユダヤ人たちが住み、会堂を持っていました。その中で律法が教えられ、ユダヤ教徒としての宗教生活が教えられただけでなく、積極的に周囲の異邦人への宣教も行われ、多くの異邦人が会堂に加わっていたのです。中には、正式な儀式を経て、ユダヤ教に改宗していた人たちも少なくなかったのです。ユダヤ教とその教えを理解して、心の中ではユダヤ教の神を礼拝していた異邦人の数になると、もっと多かったに違いありません。パウロが意図した宣教のターゲットはそのような人たちだったのです。つまり、現代の日本人のような、身も心も異邦人という人々ではなかったのです。

使徒の働きに記されているパウロの伝道活動の中に、律法も天地創造の神も知らない、完全な異邦人文化に生きていた人々に対する伝道は、たまたま、そのようになったという事件以外、つまり、パウロが予め意図していたものとしては皆無なのです。あえて挙げると、たとえ偶発的だったとはいえ、パウロが完全な異邦人を相手に伝道目的で語ったのは、キプロス島の総督、セルギオ・パウロと、ピリピの獄吏に彼の家族、それからルステラでゼウスとヘルメスに間違われた騒動の時、それからアテネのアレオパゴスでの偶然の説教、囚人として船でローマに連れて行かれる途中、嵐で難破してマルタという小島で 3 カ月ほど、過ごすことになったときだけです。

セルギオ・パウロは非常に聡明な人物で、彼の人となりに感動したパウロは、この人の名前を頂戴して、自分の名前としたと推測されるほどです。大きいという意味のヘブル名サウロから、小さいという意味のローマ名パウロに改名した背後には、パウロのユーモアと、謙遜と、異邦人への使徒という理念が現れているように思えます。

パウロがキプロス島に来て福音を語っていることを聞き及んだ総督は、自分のほうから彼を招いて福音を聞こうとしています。ときには異邦人の中にも、そのようにはじめから福音に対して心を開いている人がいることは、近代宣教の物語の中でも語られていますし、筆者の個人的体験にもあるほどです。彼はパウロの語ることを乾いた地が水を吸い込むように吸収したのでしょう。でもそれは、あくまでも例外的な出来事です。

ピリピの獄吏も異邦人ではありましたが、相当の地位と学識を持っていた人物らしく、ユダヤ教についての知識さえあったかもしれません。それ以上に、彼はすでに地震とそれに伴う出来事を通し、パウロとパウロの神に対して尋常ならない畏敬の念を抱き、「救われるためにどうしたらよいのでしょう」と、自分の方からしっかりと的を射た尋ね方をしているのです。

ルステラにおいては、パウロが行った癒しの働きを誤解した人々が、こともあろうにバ

ルナバをゼウスと呼び、パウロをヘルメスと呼んで、二人に花飾りと牛の犠牲っを奉げようとしました。

アテネでの伝道が、日本人のような完全な異邦人に対する伝道に、一番近い状況だったように思えます。ところがこのアテネでも、理由はどうであれ、人々は自分たちのほうから福音を聞いてみようとしています。日本でそのようなことが起こることは、あまり想像できません。ここでのパウロの伝道は、多くの福音派の伝道者たちによれば、失敗だったということになっていますが、たった一回の説教で、異邦人の中から数人の者が信仰に入っているのですから、大成功だったともいえます。

ただ失敗といえば、失敗もありました。ただし、多くの人たちが指摘するようなものではありません。ギリシヤ哲学などに言及して、まっすぐに福音を語らなかったことではなく、むしろ、彼がまだユダヤ人感覚から脱却できないまま、ユダヤ人向けの語りかけをしたのが失敗です。異邦人に対する順応が不完全だったのです。あまりにも早急に、話がキリストに及び、裁きの日に及び、復活にまで行ってしまったのです。完全な異邦人に向けて語るのならば、まだまだ長い時間をかけて、原則的な、基礎的なことを説いていく必要があります。もちろんこのアテネでの伝道も、パウロが意図したものではなく、ここに長いあいだ留まる予定もなかったと思われることから、あまり厳しい評価は避けたほうが良いでしょう。

ルステラで、ヘルメスに間違えられて語った場合も、まったくの偶発であったうえ、伝道を目的とはしていませんでした。難船してマルタ島に打ち上げられ、マムシに噛まれたときから始まる数ヶ月の間も、偶発的でした。たぶん、このときは時間を無駄にせず、福音を語ったことでしょう。人々はパウロを非常に尊敬しまた畏れていたのですから、機会は充分にあったはずです。ところが、そこでは、少なくても記録の上では一人の救いもないのです。あるいは、これが日本に於ける伝道に、一番近い有様だったかも知れません。

パウロは普遍的な福音、異邦人に対しても平等な救いについて、神学の上ではしっかりと土台を据えていましたが、徹底した異邦人に対する直接の伝道では、私たちが期待するほどの成果を上げることができませんでした。彼が語る異邦人への福音は、あまりにもユダヤ教的であり、律法に焦点が当てられ過ぎ、神の存在が当然の前提にされ、キリストの甦りを早々と語り過ぎていたために、完全な異邦人には理解できなかったに違いありません。当時でさえ、エピクロス派のように、無神論を唱える人たちがいたのです。

きっと、パウロよりももっと異邦人の文化になじんでいて、パウロほど律法に対する専

門知識を持っていなかった、ごく普通のディアスポラ（離散したユダヤ人）のクリスチャンたちの証のほうが、多くの異邦人たちに受け入れられたことでしょう。パウロが教えた異邦人教会の信徒たちの多くも、直接パウロの異邦人伝道によって救われた人々よりも、パウロによってしっかりと教えられたディアスポラや、異邦人クリスチャンたちの証によって、救いに導かれたと考えるべきです。

異邦人への使徒パウロが、直接の伝道対象としていた人々は、多くのユダヤ人を周囲に持ち、ユダヤ人の宗教と信仰にある程度の理解を持っていた人々であり、現代の日本人のような、「徹底した異邦人」ではなかったのです。ですから彼の思考も、「半分異邦人への福音」に留まっているのです。彼が築いたキリストと十字架の贖いの神学は、神の存在を認めるだけでなく、旧約聖書の律法の権威を受け入れている人に対する神学です。

それはまた、西欧のキリスト教文化に生まれ育った人たちには納得できる神学であり、受け入れるか拒絶するかは別として、少なくても理解の上ではなんの躓きもなかったのです。ところが私たち日本人には、「受け入れる、受け入れない」の前に、理解できないという大きな躓きがあるのです。

Ⅴ.　徹底した異邦人文化に生きる日本人のための救済論

罪を語り、キリストを語り、十字架を語り、神の愛を語り、滅びの恐ろしさを語り、悔い改めを語り、直ちに決断を迫る、私たちの伝統的な伝道方法は、たぶん、ウエスレーの影響を強く受けているものだと思います。これは神の存在、十字架にかけられたキリストの実在、聖書の権威などが当然の前提として受け入れられ、教会の重要性、聖職者の尊厳などが認められていた文化では、大いに力があったことでしょう。でも日本のような非キリスト教文化の中では、むしろ奇異に感じられるのが普通でした。そのような伝道でクリスチャンになることができた人は、奇特な日本人だったわけです。だから当然、希少だったのです。

いま私たちに必要なのは、パウロの神学をさらに展開し発展させることです。パウロが据えた異邦人の神学の土台の上に、家屋を築き上げていくことです。聖霊は、パウロや初代の弟子たちが記録したものをもって、充分な基礎知識を与えたと判断しておられます。ですから、新約聖書は完結しているのです。しかし、そこから、その新約聖書の権威をしっかりと理解し、受け入れ、その記述に反することなく、現代の私たちの実情に沿った神学を築き上げていくのが、私たちの責任です。

パウロは、少なくても完全な異邦人の間では、自分たちの神についての説明を試みています。天地を創造された方だと紹介しているのです。ただし、その程度の紹介の仕方では、現代の日本ではあまり役には立ちません。パウロの時代の人々は、現代の日本人に比べると宗教というものをもっと身近に、そして大切なものとして取り扱っていました。「神」的な存在も、ほとんどの人々が認めていました。だから、その中で、天地を創造した神という紹介は、それなりに説得力があったはずです。

ところが現代の日本では、唯物論的な感覚が非常に強くなっています。多くの日本人が「神」の存在に疑問符をつけます。したがって「神」という言葉さえもすでに躓きになっているのです。クリスチャンの多くは気づいていないのだと思いますが、幾度か述べてきたように、日本語の「神」は単に「上」という意味で、人間よりわずかに力があったり、特殊な能力があったりするだけの存在に過ぎません。人間でもちょっと能力があるとすぐ神になれるのです。野球の神だとか、料理の神がごろごろしています。ねずみでも犬でも、人間より優れた能力を持っているところがあります。だから、神になれるのです。

さらに日本人は、すべての自然物には神が宿っているという、汎神論的感覚を持っています。これと、「神」すなわち「上」の感覚が混ざり合うと、すべての自然物が「神」になりえるのです。それはいわゆる八百万の神々につながります。するとそれは同じ日本人の唯物科学的な感覚からは、あまりにもばかばかしいもの、信頼にも何にも足りないものになってしまうわけです。そのばかばかしい感覚を伴う「神」という言葉を持って、私たちのまじめな信仰を伝えようとしても、多くの場合不可能であり、信じなさいと言っても無理なのです。

「神」の代わりに「キリスト」を用いても、話はさらにややこしくなるだけです。話を本題に持っていく前に、膨大な時間と言葉を用いてキリストについて説明しなければならなくなります。もっと日本人の宗教観、日本人の感覚、日本人の文化、日本人の考え方、日本人の生き方というようなものに合った、救済論の組み立てが必要なのです。

VI.　神を紹介する

神を信じるならば、その信仰のゆえに救われるというならば、日本人はその神を知らなければなりません。日本語の「神」という言葉では言い現せない神が、私たちクリスチャンの神なのです。つまり、聖書が教える神は、日本人の神とは違うのです。神ではない神なのです。だから、神ではない言葉を持って説明する必要があります。私たちが「神」と

いう言葉を使うとき、これはとりあえず、「翻訳語」として使っているだけで、本当は八百万の神々のような神ではないことを、はっきりさせなければなりません。

ところがそのようなことをいちいち説明していたのでは、伝道にはなりません。ではどうしたらよいのでしょう。私たちは日本人が知らない神を教えようとしているのです。知らないものを教えようとするとき、たいていは、知っているものを橋渡しにして、知らないものにたどり着けるようにします。たとえば、ジュゴンという動物をまったく知らない人には、ジュゴンは水の中に住む哺乳類で、イルカのような姿をしているけれど、イルカのように敏捷ではなく、草食動物として、浅い水の中にのんびりと漂っていることが多いというように説明するわけです。するとイルカを知っている人は、運動不足のイルカのような、ジュゴンの姿を大体想像できるわけです。

では、日本人に「神」を理解してもらうための橋渡しには、何を用いればよいのでしょう。筆者は、今のところ、日本人の宗教心から始めるのがもっとも良いように感じています。ほとんどの日本人は「神」を愚かしいものと感じ、神はいないと言ってはばかりません。ところがその同じ人間が、宗教自体、あるいは人間の宗教心を悪く言うことはありません。それればかりか、折につけ神社仏閣にお参りしては、祈願したり感謝をしたりしているのです。

人間は神に似せて造られています。霊的に造られています。だから、神を感じ、神を思うようにできているのです。祈るのは人間の本能、人間が人間であることの証拠です。たとえどのような哲学をもって神の存在を否定しても、心の奥底には、神意識があり、宗教心があるのです。そしてたいていの日本人は、自分が生きていることをむしろ誰かに生かされていると感じ、ありがたいと思っているのです。

多くの日本人は、心の奥深くに感じているその有り難いお方を、誰なのか、何なのかさえ知りません。神というには恐れ多く、神とは呼べない、しかし自分が心から感謝をし、ありがたいと思っているお方なのです。九百年ほども前に、西行法師が「なにごとのおわしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる」と歌ったとおりです。

西行がこの歌を詠ったのは、伊勢神宮にお参りしたときだったといわれています。仏教の高僧であった彼が、神道の中心的存在である伊勢神宮で詠ったことにも、日本人の宗教意識の複雑さがうかがわれますが、伊勢神宮に祀られているのは天照御大神と豊受御大神であることを知っていながら、それを無視して、「なにごとのおわしますかは知らねども」と言い切ったところに、日本人の宗教意識が表現されているのです。

その方は、太陽の女神である天照御大神でも、穀物を稔らせる豊受御大神でもなく、目に見えず、耳に聞こえず、手で触れることもできないために、良くは分からないお方なのです。またそのお方はあまりにも大きく高貴なために、目に見える形に表現したり、理屈で説明したりすることさえ恐れ多く、分からないままにそっと崇めてきたのです。

そのために、この方を現す偶像は皆無です。あれほど仏教との混合が進められて、偶像礼拝も取り入れられて来たにもかかわらず、この方を表現しようとするとき、偶像は用いないのです。また、あまりにも深遠であるために、言葉で表現することさえ控えて、ただ崇めるだけなのです。それで、本来の日本人の宗教意識には神学的思索がないのです。復古神道が神学を作り上げたのは、西欧のキリスト教に対抗するためであり、言葉による偶像化ともいえるものであって、本来の姿ではありません。伊勢神宮という神社の頂点に立つ大社に祀られている神々も、せいぜい目に見えない恐れ多くも賢きお方の仮の姿、権化に過ぎないと思われているのです。

たいていの日本人は、このお方が日本中のいたるところ、津々浦々の隅々まで住んでいらっしゃると感じています。だから、どこの神社にお参りしても、どこの小さな祠に出会っても、この方がそこにいらっしゃると感じてその方を拝むのです。すべての神社がそれぞれ異なった歴史といわれを持って、それぞれの神々を礼拝しているようでありながら、礼拝している日本人は、日本中のどこにでもおられるお方を礼拝する場所として、参拝するのです。この日本中のいたるところで礼拝される方は、一般に考えられているような、多くの神々ではなく、同じお方、「お一人のお方」なのです。

表面的には、日本人は多神教徒だと思われています。日本古来の宗教である神道は多神教であると分類されています。ところが、よくよく観察してみると日本人の心にあるのは、汎神論的な感覚と、唯一のお方の感覚です。すべてのものには神々が宿っているという単なる汎神論的感覚ではなく、すべてのものには唯一のお方が宿っているという、唯一神論的汎神論の感覚です。そのお方はあまりにも深遠であるために、人間の言葉による説明を超えたものです。無理に少しでも説明しようとすると、たちまち鼠や蛇の神々になってしまいます。しかし、多くの日本人は、ねずみや蛇の神々をおろかなものとして退けるのです。

日本人は、このお方を基本的に優しく恵み深いお方、そして何よりも力のあるお方として崇めてきました。そこで、表現されたのが天照御大神という太陽神です。日本人はさまざまな恵みと力を考えて、結局太陽に行き着き、その太陽を神格化したのです。とはいえ、ご来光を拝む人たちは多くても、太陽それ自体を拝む人はほとんどいません。それは基本的に、ねずみや蛇を礼拝することと変わらないと感じるからです。ただ、すべてのものに

力を及ぼす大きく力強く恵み深いお方を感じて、そのお方に対する感覚を太陽に転嫁し、それを象徴として拝むのです。

このなんとお呼びしたらいいのかわからない大きな方が、日本を恵み祝福し、自分たちの生活を支えてきてくださったと、日本人の多くは共通して感じているのです。薄くぼんやりとではあっても、なんとなくであっても、霞がかかったようではあっても、たしかに感じているのです。これが最も一般的な日本人の宗教感覚です。私たちが天地の創造者を教えようとするとき、日本人の多くが持っているこの宗教感覚に気づかせ、天地を創造された方に導くことができないかということです。日本人の本能的宗教感覚をイルカとしてジュゴンを説明できないかということです。

また日本人は、このなんとお呼びしていいのか分からないお方の恵みと祝福を感じ、常々ありがたいと思っていながら、感謝する相手のことが良く分からず、どうしたらよいのかも分かりませんでした。そのために感謝の気持ちを素直に表現することも、充分に表現することもできないままで来たのです。これは、「この大きな恵み深いお方に対する、とんでもない不義理ではなかったでしょうか」と、お話しすることができます。

「ときには手を合わせ、お供えをし、祭りもして来ました。他にもずいぶん色々なことをして、有り難いという心を表現はしてきたのです。でもそれは、自分たちが受け続けてきた大きな恵みと祝福、命を与えられ守られてきた大恩に比べて、あまりにも不充分ではなかったでしょうか。この不義理を、私たちは『罪』と表現しています。ですから、この不義理をお詫びして、『お赦しください。これからはもっとたくさん感謝し、もっとたくさんあなたのすばらしさを称え、あなたのお喜びになるような生活をしてまいります』というのが大切なのです。それを私たちは悔い改めと言う意言葉で表現していることです」と、お話しすると、「罪」とか「悔い改め」とかいう、とても難しいキリスト教の教えも、日本人に分かりやすくストンと腑に落ちるのです。人間関係を重視する日本人にとって、不義理というのは、大きな罪だからです。

日本人も神に似せて作られた人間です。霊の本質を持ち、神に対する感覚を持っています。しかも、聖書が教える天地の創造者にきわめて近い神感覚を持っています。それを橋渡しにして天地の創造者を理解させる以上に、良い方法があるでしょうか。もちろん日本人の神感覚は、さまざまな欠点と間違いを抱えています。だからといってこれを偶像礼拝といって敵視し、糾弾し、むげに退けるのではなく、むしろ、神に似せて造られた人間のきわめて根本的な資質が、悪魔の支配と罪の社会の環境によっても、完全に払拭されないままに残っていると考えて、利用するほうが得策というものではないでしょうか。

これまでのように、日本人の宗教感覚をすべて堕落した人間の偶像礼拝として退け、まったく異なった聖書の宗教観を、「神」という曖昧な言葉を用いながら持ち込む方法では、埒が明かないことがすでに明らかです。パウロの異邦人伝道が、まだまだ初期段階のものであったことは、すでに学びました。その異邦人のための神学も未発達なことが明らかです。しかし彼は、徹底した異邦人たちを前にしたとき、少なくても、「あなた方が知らずに拝んでいる神について教えてあげよう」と、異邦人の不完全で間違いだらけの神観念を、あえて「橋渡し」として用いようとしました。

ユダヤ教に触れる機会がなく、律法も、キリストも知らない人たちに対しては、アプローチを変えたのです。異教徒たちがパウロとバルナバをギリシヤ神話の神々と勘違いして、牛を犠牲として捧げようとしたときも、パウロは天地創造の神という点を強調しています。そのパウロの、「徹底した異邦人」への伝道の取り組みの糸口をたどり、パウロが手をつけなかった、まったくの異邦人伝道のための神学を作り上げていくことが、現在の私たちの使命です。

ただし私たちは、たとえどのような方法を用いたとしても、神について完全に説明しきることはできないし、間違いなく正しく理解してもらうことも不可能だということを、しっかりと確認しておかなければなりません。どんなに説明して、どれほど学んでもらったとしても、不十分で不確かな神の理解しかできないのです。もしも私たちの救いが、神についての理解やキリストについての理解に関わるものならば、私たちは決して救われないのです。しかし幸いなことに、私たちの救いは私たちの理解によるのではなく、神の愛と人間を救おうとなさる神のご意思、そして確実に遂行された救いのみ業と、聖霊の働きによるのです。

キリストと共に十字架についた強盗殺人者は、キリストについてはほとんど何の理解もなしに、救いを得ることができました。筆者が働く教会の九十歳になる盲目の老人は、昨年のクリスマス直前に洗礼を受けました。耳も遠く、あまりお話もできません。でも、神に信頼したために、キリストの完成した救いのみ業のゆえに救われたのです。私の次男は四十歳に近くなっていますが、三歳児ほどの理解力しかありません。でも、神様を信じ、キリストに信頼して祈っています。救いにはそれで充分なのです。

私たちのために、神様が何をしてくださったかを知るのは、とても重要で素晴らしいことです。でも、もっと大切なのが、神を信頼することです。私たちの救いのために求められるのは、この信頼なのです。

結び

「イエス・キリストは、あなたの罪の刑罰を身代わりに背負って、十字架で死んでくださいました。あなたはそれを信じますか。信じれば天国に行けます。信じなければ地獄で苦しまなければなりません」
「イエスキリストがあなたの罪を背負って、十字架で身代わりに死んでくださったことを信じますか。では、あなたの罪を悔い改めて、イエス様の救いを受けてください」
「神はあなたを愛して救おうとなさり、ひとり子イエス様を十字架につけてくださいました。この愛の神を信じましょう」

私たちはいろいろな言い方で、キリストによる救いを語ろうとしてきました。でも、このようなユダヤ人向けの福音の説明、あるいは西欧キリスト教文化に生まれ育った人向けの伝道では、日本人には分ってもらえないのです。理解されないまま語り続けても、福音は福音になりません。せめて日本人に理解されるように語って、福音が理解されないことにではなく、福音にそのものに躓く機会を与えたいものです。

女の子が、自分のためにお母さんがどんなに苦しんでくれたかということを知るよりも、お母さんを慕って生きることのほうが大切でした。まず、天地の創造者を慕って生きることを教え、それからゆっくりと、この天地の創造者が救い主キリストを通して、私たちのために何をしてくださったかを話していきましょう。